

平成28・29年度 長崎県教育委員会研究指定
平成28・29年度 長崎市教育委員会研究指定

「見つめる目・感じる心・考える頭」を身に付けた児童生徒の育成
～小中一貫のメリットを生かした主体的・対話的で深い学びの実践を通して～

1 研究主題について

本校は「野母崎の子どもたちによりよい教育を」という地域の願いを受け、長崎市初となる小中一貫教育校として開校し、今年度4年目を迎える。本校は、開校初年度より、小中一貫システムの研究を進めてきており、異学年交流や乗り入れ授業など小中間の円滑な接続のための取組や小中一貫教育を行うための体制づくりについては、定着してきている。

そこで、平成28年度からは「見つめる目 感じる心 考える頭」を合言葉に、新たな小中一貫教育校としての取組を始めた。

「見つめる目」とは、情報収集力、観察力、広い視野、好奇心、意欲などの資質、「感じる心」とは、協調性、思いやりの心、憧れ、尊敬の心、協働の精神など主に人と関わることで育つ資質、「考える頭」とは、情報処理能力、思考力、判断力、活用力、探求力、実践力などの資質をさす。

さて、平成29年3月に告示された新学習指導要領には、知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」という視点が示され、「何ができるようになるか」を明確化した授業改善の工夫が求められている。

本校の児童生徒の実態として、開校以来の学力向上プロジェクトにより基礎学力については伸びが見られるものの、「思考力」「判断力」「表現力」の育成に課題があることは確かである。

これらの課題を解決するために「『見つめる目 感じる心 考える頭』を身に付けた児童生徒の育成」を研究主題とした。

また、新学習指導要領を受け、授業改善を進めていくために、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の三つの柱ですべての教科等を再整理していくことの必要性が明確になった。

しかし、中学校のように教科担任制では、1教科で取り組んでも効果が上がりやすく、また、小・中学校のそれぞれの単独の取組では、学習スキルを上げて、学習効果を実感できるまでには時間がかかることも考えられる。その点、本校では小中一貫校の強みを生かし、小学校から9年間を見通して、発達段階に応じた授業規律と思考力を育てる授業を積み上げていくことが可能であると考えた。また「何ができるか」、「何がわかっているか」の実態把握ができていく子供が中学校に入学してくるので、継ぎ目のない実践を積み重ねていくことができる。本校のような小中一貫教育校で、思考力を育てる授業を研究していくことには大きな意味があると考えた。そこで、研究の1年目に「小中一貫で実践するアクティブ・ラーニングを通して」としていた副主題を平成29年度より、「小中一貫のメリットを生かした主体的・対話的で深い学びの実践を通して」と改めた。

2 研究の方向性及び内容

- (1) 開校当初から本校が構築した学力、心力、体力のプロジェクトによる小中連携システムを検証し、より良い形で継続を進めること。

- (2) 本校がこれまでに取り組んできた「あおしお学習スタイル」とする学習規律に、さらに「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）を視点を据えた、思考力・判断力・表現力を育てる授業の実践を行うこと。
- (3) 小中間の乗り入れ授業のスタンダード化を目指した情報共有と授業実践。
- (4) 探究活動を取り入れ、9年間の系統性をもたせた学習活動を展開し、「生活科・総合的な学習時間」のカリキュラム・マネジメントを推進する。
- (5) 地域と連携した「のもぞき学」の企画・実施を通して、思考力・判断力・表現力を育成する。

3 研究成果の要旨

(1) 学力・心力・体力プロジェクト（H29から校務分掌へ）

【学力】

- 小中9年間を通じた学習規律が整備できた。
- 児童生徒の実態に合わせて、スキルタイムや家庭学習の習慣化に向けての取組の改善を図ることができた。
- 各種学力テストや授業研究をもとに、児童生徒の弱点を全職員で共通理解ができた。また、明らかになった児童生徒の課題に対して、スキルタイムの実施計画を立てたり、授業方法の改善をしたりすることができた。
- 平成29年度の各学力調査において、以下のような成果が見られた。

4年・・・国語は全国・市とほぼ同水準、算数は、上回った。
5年・・・国語・算数ともに市・県と同水準であった。
6年・・・算数のA問題においては、全国・県・市とほぼ同水準であった。
7年・・・全国・市ともに下回ってはいるものの、そのポイント差が縮まった。
9年・・・国語のB問題において、全国・県・市を上回った。

【心力】

- Dream dayやブロック集会など、これまで研究プロジェクトとして取り組んできた活動を校務分掌に位置づけ、継続しやすいシステムに変えることができた。
- Dream dayの中学生による読み聞かせは、事前指導・練習、生徒同士の相互評価が充実し、選書や読み方などが上達してきた。
- Dream dayの活用により、小学生はより上のレベルの中学生を目指して学校生活を送ることができている。
- ブロック集会では、ねらいと年間活動計画を教師間で共通理解しておくことで、各期の職員で協力して進めることができた。また、ブロック集会の内容も学期ごとに発展的な内容を工夫することができてきた。
- 5・6・7年生の中期ブロック集会を実施したり、Dream dayを定期的にも実施したりすることで、中学校へ進学することへの抵抗が少なくなり、中一ギャップ解消の一助となった。

【体力】

- 小中の体育科担当が常に連携して体育的行事や体力テストを実施したり、乗り入れ授業を行ったりするなどの取組が定着している。
- 1～9年生まで同じ項目で生活チェックカードを実施し、継続した指導ができた。
- 部活動の活性化のため、中学校の新生生に対する部活動紹介を小学生のうちに実施することができた。

(2) 授業研究と実践

- 「主体的・対話的で深い学び」のための授業改善として、以下のような手法を用いることができた。
ペア学習 グループ学習 付箋を用いた意見の出し合い・整理
フレームワーク ワールドカフェ 合唱パート練習
- 児童生徒が授業に対して大変意欲的になった。
- 教員が「主体的・対話的で深い学び」を意識したことにより、様々な手法を試すようになった。
- 付箋やフローチャートなどの思考ツールを用いることによって、児童生徒一人一人の思考が以前よりも深まっていく様子が見られた。
- ペア学習、グループ学習の増加により、自分の考えを深める機会が増えた。
- 学習規律の指導徹底、協働的な学習の機会の増加により、相手の話を聞く態度が良くなった。
- 29年度は、前期でも乗り入れ授業により学習効果が期待できる教科・単元の洗い出しを行い、全職員が乗り入れ授業を実践することができた。
- 乗り入れ授業を中心に授業研究を行い、小学校教員のきめ細かさや中学校教員の専門性を効果的に活用することができた。5・6年生では、中学校教員から、中学校の単元とのつながりを聞くことによって、今後の学習への見通しや意欲をもつことができてよい。
- 計画的な乗り入れ授業のほかに、小学校の全教科、全学年において、中学校教員の空き時間にTTや少人数指導に入ってもらい、個別指導の充実と児童理解を深めることができた。

(3) 9年間の系統性と、身に付けたい力を明確にしたカリキュラム作成

地域や保護者と連携して、探究学習を深めていけるように、既存のカリキュラム（のもぎき学）を見直し、再構築することで、本校児童・生徒の課題でもある「思考力・判断力・表現力」の育成、さらには「将来において地域を支え、発展させる人材の育成」をも図ることができる考える。

従来の「のもぎき学」

地域ごとのグループに分かれて、ローテーションで他地区を調べる。

地域在住の有識者の講話を聞き、特に伝統的な祭りを中心に調べて、各自レポートや新聞にまとめる。

→**問題点**：資料が少なく、地域に出ていく時間が取れないため、浅い調べ学習になってしまふ。地域ごとの調べ学習なので、毎年同じような内容になってしまう。

変更点（7～8年）

学年ごとのテーマに沿って各自の課題設定をする。

（7年：伝統行事 8年：産業 9年：発信）

1学期に講話を聞き、夏休みを利用して地域で取材や調査などの情報収集をする。



2年生の「町たんけん」



7年生のハイヤ節



9年生による劇

9年間の系統性を意識したカリキュラムマネジメント

小学校までの学習を生かし、中学校では、表現や発信をより意識した活動へと発展させる。

地域に根ざした学習

- 1年生・・・地域と自然
- 2年生・・・町たんけん
- 3年生・・・野母崎を知ろう（自然・環境・祭）
- 4年生・・・人にやさしい街づくり（福祉学習を通しての地域交流）
- 5年生・・・野母崎の産業について考えよう
- 6年生・・・野母崎の観光について考えよう（軍艦島）
- 7年生・・・「のもぎき学」（伝統）
- 8年生・・・「のもぎき学」（産業）
- 9年生・・・「のもぎき学」（野母崎を題材にした劇）

4 今後に向けた課題と改善策

- 職員が替わっても、9年間一貫した学習規律を徹底していけるよう、確実な引継ぎを行っていく。
- ペアやグループでの話し合い活動が増えたが、自分と異なる意見や少数意見のよさを生かしたり、折り合いをつけたりして自分の意見をまとめることができていない。「話し合いお助けカード」を活用しながら、経験を積み重ねていく。
- 家庭学習の時間が少なく、携帯・スマホ等の利用時間が長いという実態が明らかになっている。PTA、保護者とも連携し、家庭での学習の習慣化をさらに周知徹底していく。
- どの学年においても基礎学力が十分には定着していない面も見られる。改善のためには、本校の特色を生かした乗り入れ授業のさらなる活用、複数教師による個に応じた指導の充実（TT・少人数指導）を行っていく必要がある。
- 話し方や話の聞き方の定着が不十分な面がある。掲示物を活用しながら継続的指導が必要である。
- 縦割り遊び、ブロック集会については、ねらいと年間活動計画を年度当初に職員、児童生徒ともに共通理解しておく必要がある。
- 中期のブロック集会は、小中の予定を合わせて時間を設定するのが難しい。年度当初に予め日程を設定したほうがよい。

- 毎回のDream dayの振り返りをカードに記入しているが、それがうまく次に生かされていないので、振り返りカードの在り方と生かし方を検討する。
- 体力テストのデータを分析して、各学年に合った体力の向上を目指し、9年間を見通した指導に生かしたい。
- 生活チェックカードを生かし、よい生活リズムの定着を図っていききたい。
- 学級の児童生徒全員が「深い思考」「深い学び」になるための手立てを講じる必要がある。
- 様々な考えを生かしながら、自分の考えをまとめられるように、「個人思考→グループ活動で考えを広め、深める→個人で再度考えをまとめる」というサイクルを9年間継続して、授業に取り入れていく。
- 「主体的・対話的で深い学び」に向けての実践を教員間で共通理解の機会を設け、研修を深める。
- 本校の児童生徒を、中学生の段階で見たとき、一人ひとりの課題設定力、問題解決力が不十分である。その解決のためには課題設定や計画の時間の持ち方に工夫が必要である。今後はさらに課題解決的な単元作りに努めたい。
- 生徒の興味を引き出すためには新しい題材の発掘、地域の協力者をさらに増やしていくことが必要である。
- 文化的行事を活用した発表や発信の場の設定について、試行錯誤を継続する。指導すべきプレゼンテーションの手段やスキルについて、教師側の研鑽や情報交換を活発に行う。

学 校 名	野母崎小中一貫青潮学園 長崎市立野母崎小学校・長崎市立野母崎中学校
所 在 地	長崎市野母町1番地
学校長名	高 木 久 人
指定期間	平成28年4月1日～平成30年3月31日
指定領域	小中一貫教育
研究発表会	平成29年11月2日（木）参加者80名